

# ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2024年9月20日

# No.149



慶長の馬場寄進碑

(1926年刊行『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第四冊』より)

## もくじ

- 1-2 国天然記念物指定 100 年 馬場大門のケヤキ並木  
その②…慶長の馬場寄進碑
- 3 展示会案内  
企画展 戦いと争い  
～将門の乱からアジア・太平洋戦争まで～
- 4-5 NOTE  
野鳥に見る 三冠王座交代の印象
- 6 series 祈願と御利益  
②天気をめぐる祈願
- 7 最近の発掘調査  
清水が丘西遺跡で発見した古墳時代前期の  
竪穴建物跡
- 8 近代プラネタリウム誕生 100 周年！  
プラネタリウムについて知ろう！  
⑥プラネタリウム施設の目的

## 国天然記念物指定 100 年 馬場大門のケヤキ並木

おおくにたま  
大國魂神社の参道であるケヤキ並木は、1924年（大正13）に国の天然記念物に指定されました。今年  
はちょうど100周年です。この機会に、博物館では12月から1月にかけて、展示会の開催を予定して  
います。本誌でもケヤキ並木にまつわる話題を4回  
シリーズでお届けします。

## その②…慶長の馬場寄進碑

けいちよう ぼぼ きしん せきひ  
慶長年間に馬場が寄進されたことを伝える石碑の、  
およそ100年前の姿です。少し移動していますが、  
今も並木の南端に立っています。



Fuchu Next 100years

国天然記念物指定 100年

# 馬場大門のケヤキ並木

## その②…慶長の馬場寄進碑

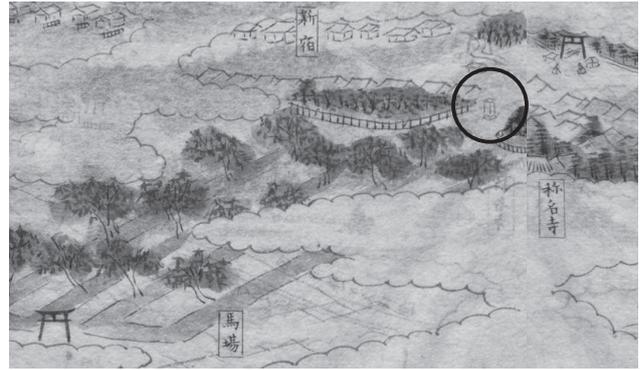
馬場大門のケヤキ並木は、平安時代末期に源頼義・義家父子が苗木を寄進したという言い伝えと、江戸時代初期に徳川家康が苗木と馬場を寄進したとする言い伝えがあります。いずれも、同時代の確実な史料がないため、信憑性に問題がない訳ではないのですが、ここで紹介する「慶長の寄進碑」は、家康による寄進を伝える資料の一つです。ここでは伝説の信憑性は置いておいて、寄進碑そのものの来歴について述べたいと思います。

表紙の写真は、1926年（大正15）に刊行された『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書 第四冊』からの転載です。およそ100年前、寄進碑は蔵造りの建物の傍らに佇んでいて、刻まれた文字の下方は埋もれていたことがわかります。

この碑はケヤキ並木の東側列の南端に移されているものの、現存しています。1993年（平成5）には市の文化財にも指定されました。高さ156cm、横幅47.5cm、奥行き37cmの花崗岩製の角柱で、頂部は山形をしています。正面には、〈ここから一の鳥居までの五町にわたる左右は、慶長年中に寄付された馬場である〉といった文言が刻まれています。

ただ残念なことに、建立の年月日は刻まれておらず、誰がこの寄進碑を立てたのかもわかりません。また、馬場の寄進者を記さず、寄進の年も慶長年中（1596～1615）とあいまいです。慶長年間やその直後の建立ではない、とってよいでしょう。

寄進碑の建立はいつ頃のことなのでしょう。寄進碑の存在を示す最も古い記録は、1820年（文政3）に脱稿した『武蔵名勝図会』のようです。同書には、その姿を描いた挿絵が載り、本文には「甲州街道と大門路の衢に石碑在」と記されています。これを前提に、同書に載る六所宮（今の



『武蔵名勝図会』の府中宿の鳥瞰図の一部拡大

○の位置に寄進碑が描かれている（国立公文書館提供）

國魂神社）の境内とケヤキ並木を描いた鳥瞰図を観ると、甲州街道と大門の交点付近にゴマ粒ほどの大きさに描かれている灯籠のようなものがこの寄進碑なのだと思えます。これにより、1820年以前に石碑が建立されていたことがわかります。

江戸時代後期には行楽のガイドブックともいべき地誌の編さんが盛んになり、江戸の文人墨客たちが近郊を散策して紀行文を残すようになります。しかし、『武蔵名勝図会』よりも古い地誌や紀行文に寄進碑を見出すことはできません。もしかすると、『武蔵名勝図会』は全体的に記述が詳しいため、寄進碑に触れてくれたのかもしれませんが。

さらに、幕府が編さんして1830年（天保元）に完成した『新編武蔵風土記稿』を繙くと、六所宮の境内とケヤキ並木を描いた鳥瞰図のなかに、やはりゴマ粒ほどの寄進碑を確認できます。また、1836年に完成した『江戸名所図会』（巻之三）に載る同じような鳥瞰図や、1860年代の作成と推定される『国府台勝概一覽図』という府中宿の鳥瞰図にも、寄進碑は描き込まれています。

このように、1820年以降に広く知られるようになったのだとすれば、建立はその年をそれほど遡らない頃だったのではないのでしょうか。そうであるなら、文人墨客をはじめとする人びとの物見遊山が盛んになった時期と重なります。今でいうまちおこしに似た動きも盛んになった時期です。こうした背景のなかで、ケヤキ並木の由緒を語る寄進碑が建立されたのだと考えたいところです。（深澤靖幸）

# 戦いと争い～将門の乱からアジア・太平洋戦争まで～

9/14 (土) ～ 10/27 (日)

会場：本館 2 階 企画展示室

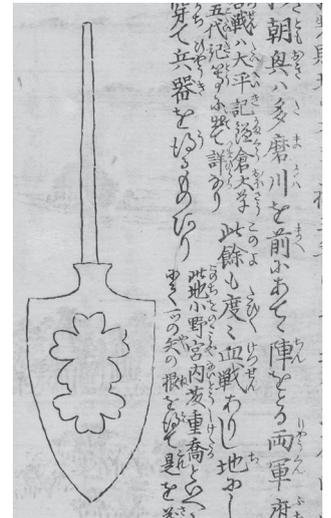
今年の 8 月 15 日、日本はアジア・太平洋戦争の終戦から 79 年を迎えました。人口における戦後生まれの割合が 90% 近くを占める現在、私たちにとって平和は日常になっています。しかし、世界に目をむけると、今まさに戦火の真っ只中の国があるのは、周知のことでしょう。

ここ府中という場に限っても、歴史を紐解けば、数えきれないほどの紛争を経験してきました。武蔵国府という場所が持つ軍事的・政治的重要性から、反乱者などが標的とすることもありました。また、鎌倉時代から室町時代にかけては、交通の要衝で、かつ鎌倉の防衛ラインである多摩川に接しているため、軍勢の参集地や陣所、合戦の場になりました。

江戸時代になると、社会的な安定期に入りますが、「戦いと争い」は、小規模な団体や個人の間にも起こります。その際、火種となるのは、やはり利益の大小で、村々が共同で使う入会地や用水等に関わる不平等は、時として大きな騒動に発展しました。また、自己の利益が損なわれていると感じた場合、何度も訴訟を繰り返し、その主張を通そうとする人も現れました。

そして、江戸時代末期の 1858 年（安政 5）、日米修好通商条約の締結により、ついに日本は本格的に開国します。それは、欧米列強を中心とする国際社会に身を投じることでありました。欧米の属国化への危機感は、日本を自立・自衛のための経済・軍事力強化に向かわせ、明治時代の日清・日露戦争を経て、東アジア唯一の植民地帝国となっていくます。

それに伴い、欧米諸国との軋轢も生じてきましたが、日本は自国をアジアの盟主と位置づ



江戸時代に田んぼの中から見つかった矢じり

1333 年（元弘 3）の分倍河原合戦のものとして、市内の旧家に保存され、江戸時代後期の地誌『江戸名所図会』にも描かれた。

け、領土拡大のための戦争を続けました。そして、1937 年（昭和 12）から始まった日中戦争の膠着化打開のため、東南アジアの資源確保を目指してアメリカなどと戦争をはじめた日本は、非常に大きな犠牲を払うことになったのです…。

「攻撃は最大の防御なり」という諺は、「防衛のためには相手を屈服し得る力が必要だ」と、捉えることもできます。実際、防衛のための自立や自衛は、戦争を仕掛ける側が侵略や略奪を正当化するキーワードとして、しばしば使用してきました。もちろん、生きていく上で、自己や所属する集団を守るために戦わなければならないこともあるでしょう。しかし、その手段は歴史に学ぶ必要があると思います。

「戦争を二度と繰り返してはいけない」と誰しも言います。しかし、人と人、国と国の間には必ず権力の強弱や利害の大小が存在します。その不均衡が大きな犠牲を伴う戦争へ向かわないように、この平和を永く続けるためにはどうすれば良いのか…。難しい問題ではありますが、この展示会がそれを考える機会となれば、幸いです。（花木知子）

# 野鳥に見る 三冠王座交代の印象



市内（武蔵台1丁目）の庭木に止まる猛禽類・ツミ 撮影：影山昇

近年、府中野鳥クラブが撮影した写真の中に、住宅の庭にやって来た猛禽類・ツミの姿がありました。ワシ・タカの仲間が市街地に出没する時代となっているのです。そこで、市内の各環境下において我々が認識する鳥の代表は、以前と今で変わっているのかを考察してみようと思います。

## ▼ 市街地選手権王座移動 ヒバリ→カラス（森林出身）

1970年代は、府中市街地の王者はヒバリでした。何と云っても市の鳥に選定されるほど、市内で普通に見られたからです。当時は市街地にも草地や農地が残り、背の低い草がまばらに生える場所を好むヒバリには棲みやすい環境でした。春の晴天に天高く舞い上がりさえする春告げ鳥として、人の目には象徴的存在に映ったのでしょう。生息数としてはスズメやムクドリの方が上回っていたかも知れません。どちらも人の生活に依存するタイプの鳥なので、住宅の多い市街地では当たり前前に活動していたからです。但し、農作物を荒らしたり、農家に侵入したりなど、嫌われる側面も手伝い、さすがに王者としては受け入れ難い印象だったと言うことでしょうか。

さて、そのヒバリですが、現在の市街地に姿は

見えません。市の鳥はいずこへ…？ かるうじて市の南縁に沿う多摩川の河原で営巣し、市の鳥の称号を何とか維持しているのが現状です。となれば、市街地の顔は何に代わったのか…？ それは都市化でビルなどが林立し始めた70年代以降から急激に増えだしたハシブトガラスです。元は熱帯のジャングル出身ですが、北へ分布を伸ばして日本にもやってきました。以前は高尾山などの森林を根城にし、都市には少なかった鳥です。本来の居住区である森林の減少により、市街地に拠点を移して来たと言うわけです。数も多く、選り好みのない雑食性で、かつ頭抜けた頭脳の持ち主であるカラスは、巧みに人の食べ残しなどを利用しながら見事に都市に適応したのです。時に迷惑な存在でありながらも、誰もが認めざるを得ない市街地のボスとして、さしずめヒール（悪役）チャンピオンと言ったところでしょうか。

## ▼ 多摩川選手権王座移動 サギ→カワウ（湾岸出身）

多摩川では、水辺を採餌場にするサギの仲間が普通に目立っていました。ダイサギ・コサギ・アオサギなどが豊富な魚を狙う姿は、まさに多摩川の主に相応しい印象でした。これに1980年以降、

強力なライバルが出現しました。サギ同様に、大型で魚が大好物の鳥・カワウです。70年代初頭、一時的に汚染された多摩川が、下水道政策などでふたたび水質の改善を見たタイミングで増えだしたのです。かつての多摩川で行われていた鶺鴒のウミウとは別種です。カワウは、大きさ、色ともにウミウと似た黒装束ですが、背や翼にやや褐色部分があり、くちばし基部の黄色い口角部分に丸みがあります。東京湾岸に営巣地があり、周辺での餌が十分ではなかったのか、いくつかの集団に分かれて都内や近県の水場に遠征を始めました。この目的地のひとつが多摩川だったので、水質が浄化され魚が増え出したあたりから劇的に飛来するようになりました。大食漢のカワウは、何百羽もの群れで押しかけ、コイ・フナ・ウグイなどを食べまくりまします。サギの食いぶちはもちろん、釣り人の釣果にまで影響する始末です。多摩川のカワウの個体数が減っているわけではありませんが、サギと同サイズで黒衣の集団というイメージが勢力図の判定に拍車をかけた格好



になっていきます。新参者の勢いで、今は一旦タイトルをサギから奪ったと見るべきでしょう。

#### ▼ 雑木林選手権王者誕生？ 空位→インコ（海外出身）

今年6月、府中野鳥クラブが定例の多磨霊園内調査において、サクラの木に営巣するワカケホンセイインコの撮影に成功しました。本種はインドやスリランカ原産の大型インコです。人が持ち込んで、ペットショップなどで販売されていましたが、脱走して東京を中心に繁殖拡大した鳥です。1980年以降は、さらに増加して東京で1,000羽以上、関西方面でも一部確認されるまでに至っています。高木に巣穴を掘って生活するため、街中では街路樹、多磨霊園や隣接する浅間山では豊富な樹木が格好の棲みかとなります。

雑木林は、一年を通して生息する留鳥としての主家です。また、季節毎に渡って来る夏鳥の繁殖地、あるいは冬鳥の越冬地としても活用され

る場所です。よって、ある種の鳥が際立って存在することもなく、平等に活動し



ています。稀に珍鳥が訪れた際に注目が集まる程度です。まさに王者不在によりパワーバランスの安定した聖域とも言える環境なのです。しかし、今や外来種が繁殖する事態を迎えました。そもそも熱帯産のインコが東京に定着したのは、都市気温の高さも加勢しましたが、百羽単位で脱走したことで繁殖可能な個体数が満たされていたからです。さらには、植物の蕾・花・果実・葉・冬芽などを食す彼らにとって、十分な樹木や緑地が都市に揃っていたことも幸いしました。今回のように、浅間山エリアに見られた繁殖行動も、彼らがこの上ない適地を市街地の中に見つけてしまった結果と思われる。

硬いクチバシで幹に穴を開け、洞を拡張し、樹木の成長に悪影響を及ぼす荒くれ者ですが、不思議なことに人から嫌われることはありません。在来種との目立った抗争も聞かれないのです。むしろ大型でカラフルな色彩を持つ美しい鳥として捉えられている印象です。今後も勢力を伸ばすであろう予測の元、樹林地では暫定的ながら、王者と名乗るべく、直近に位置する者と感じた次第です。

生態系の仕組みとしては常に猛禽類が頂上を占め、不動の王座を守っていますが、各環境下における勢力イメージという視点では、数や強さのアピール度からそれぞれの一番が異なります。生きものの勢力図を見直すことで、周囲の環境変化を考えるきっかけにもなります。王座交代劇などと称して勝手に主役の鳥を語りましたが、今後の自然界の流れを見ていく上で、このような角度から鳥の動向を観察するのも、目安としては面白い気がします。ボクシングの井上尚弥選手ではありませんが、統一王者が現れる日も近いかも知れませんね。



## ② 天気をめぐる祈願

農業等の第一次産業では、暑すぎても寒すぎても収穫物の収量や品質に影響を及ぼします。そのため人々は、神仏へ祈願し、その御利益として安定した天候、そして豊作等を得ようとしてきました。

このような祈願は、集落全体で行われることが多く、府中市域でも祭事の執行や、遠隔地の寺社に集落を代表して参詣する「代参」の記録を見ることがあります。

例えば、『府中市史』（1974年刊）には、小野宮（現 住吉町）で4月頃にヒョウ祭をしていたとあります。4月から7月頃は季節外れの冷たい雨や雹が降ることがあり、農作物の生育に悪影響を与えます。そうならないための祈願をしていたようです。

また、人見（現 若松町）の集落では、雹除け・嵐除けで有名な群馬県の榛名神社に2～4人を参拝に出す代参を終戦直後まで行っていたとあります。代参に出た人はお札をもらい、それを割った竹の先に挟み、杉の葉をかぶせて辻に挿していたようです。押立町では青梅市の武蔵御嶽神社に代参し、嵐除けのお札をもらったといえます。

雨が降らず、水に困ると雨乞いが行われました。本宿町では、小金井市の貫井神社の湧き水をもらい、木製の龍頭と藁の胴を組み合わせて作った竜に、その湧き水をかけるという雨乞いをしていました。市内ではそのほかにもさまざまな雨乞いがあったと言われています。

8月には、到来する台風による大雨・大風の被害がないように祈る風祭が行われます。

大國魂神社では六所宮と呼ばれていた江戸時代以前から風祭が執行されており、それは春の氷雨祭（ヒョウ祭に相当）とともに2024年現在も続いています。

本宿町の熊野神社でもコロナ禍の直前まで8月中旬に風祭をしていました。こちらは氏子総代らが集まり、神職による神事が拝殿で行われたとのこと。

四谷の三社宮神明社では、現在も8月初頭に風祭があり、ここでは神職を招かず、氏子を中心とした人々で執り行います。まず、神社と境内の掃除をしてから、氏子総代の首頭で一同が礼拝をします。それが済むと近所の公会堂へ移動し、9月上旬に行われる秋祭の打合せが行われます。神事の終了後、別の祭りの会合を行っているようにもみえますが、地域で行うさまざまな祭事は、おごそかに祈願するだけでなく、話し合いをしたり、共に飲食したりすることで人々の結びつきを強める側面があります。そのため、風祭の名のもとに集まる機会を効率的に活用している印象です。

このように、大國魂神社や四谷の例はありますが、かつて市内各所で行われていた雹祭や風祭、雨乞い等の祈願は、現在ではほとんど行われていないようです。これは、天気予報などの科学技術の発達に加え、農家が減少したためだと考えられます。もっとも、湧き水は飲み水等の生活用水に関わるので、全国的には雨乞いの実施や復活の事例が確認できます。府中でも深刻な水不足が生じたら、その儀式が復活するかもしれません。

天気に関する祈願のあり方は、地域における主要産業の推移や、気象に関する科学知識の浸透等により変化してきました。古くからの祭事を継承しつつ簡素化したり、完全にとりやめたり…。その経緯を検証することで、過去から現在まで、人々が天気とどう向きあおうとしてきたのか、その変遷をたどれるかもしれません。（荒一能）



四谷・三社宮神明社の風祭

最近の発掘調査

# 清水が丘西遺跡で発見した 古墳時代前期の竪穴建物跡

清水が丘1丁目 府中市ふるさと文化財課

佐藤 梨花



土器の出土状況

近年、古墳時代前期の集落跡である「清水が丘西遺跡」で調査を行い、竪穴建物跡を発掘し、珍しい発見がありましたのでお伝えします。

今回発掘した竪穴建物跡は1辺5m以上ある隅丸方形のものです。調査区内では建物跡の南東部を確認し、床面で炉跡を発見しています。壺や甕、高坏、器台、小型壺、注ぎ口のある鉢等、多量の土器が出土し、完形や完形に近いものが多くを占めます。中でも甕は20点以上あります。また、赤く彩色された土器も多く、甕以外では無赤彩のものよりも多い印象すらあり、特に小型壺や小型器台が目立ちます。

これらの土器を見ると、全体的に日常生活の中で使用するものとしては、やや特殊な印象を受けます。甕は煮沸具、今でいうところの鍋に相当し、当時の日常雑器として集落跡では必ず出土するものですが、1棟の竪穴建物跡から20点以上は極めて珍しいといえます。また、赤彩された小型壺や小型器台といった、祭祀等に関わる可能性のある土器が目立つことも特徴です。清水が丘西遺跡の他の建物跡からもこうした土器の発見はありますが、この建物跡についてはその比率が高いといえます。

以上を考えると、この建物は集落の中でやや特別な役割を持っていた可能性があります。出土土器がこの建物跡で使用されたものなのか、建物が使われなくなった際に廃棄もしくは埋納されたのかは分かりません。ただ、仮に後者だとしても、甕の量や祭祀等に関わる土器の比率が高いことから、その特殊性が窺えます。

今回見つかった土器の状況は非常に興味深く、未だ不詳な点も多いのですが、今後、整理作業を進める中でこの建物跡の性格や集落内での役割を明らかにできればと思います。その際は改めて皆様にもお伝えします。



注ぎ口のある鉢

# 近代プラネタリウム誕生 100 周年！

## プラネタリウムについて知ろう！



### ⑥プラネタリウム施設の目的

近代プラネタリウム誕生 100 周年を記念した連載も 6 回目となりました。今回はプラネタリウム施設の目的についてご紹介します。

全国には 300 近くのプラネタリウム施設がありますが、その設置目的は施設によって異なります。日本プラネタリウム協議会発行の『プラネタリウムデータブック 2020』（右下図）によると、設置目的として最も多いのが「科学・天文学の普及と理解促進」、次いで「学校教育の補助」、「生涯学習の推進」と続きます（複数回答可）。府中市郷土の森博物館の設置目的は、「市民の教育、学術及び文化の発展に寄与すること」なので、右下図の項目では、「科学・天文学の普及と理解促進」「学校教育の補助」「生涯学習の推進」「豊かな文化環境の形成」に当たります。では、目的達成のために、当館プラネタリウムで、どのような取組をしているのかみてみましょう。

まず、「科学・天文学の普及と理解促進」「生涯学習の推進」については、番組を通して、市民の皆さんに星や宇宙に興味や関心を持ってもらい、さらに実際の星空を見たいと思ってもらえるように、ターゲットに合わせた投映を行っています。子供向けや大人向けの番組を用意し、私たち解説員が分かりやすい言葉で伝えることで、楽しみながら星や宇宙、天文現象について知ることができます。投映を見たあとに、観覧者が実際の夜空を見て、宇宙に思いを馳せたり、科学的な事柄を自分の知識の中に収めて、人生をより豊かにしてもらえるように努めています。

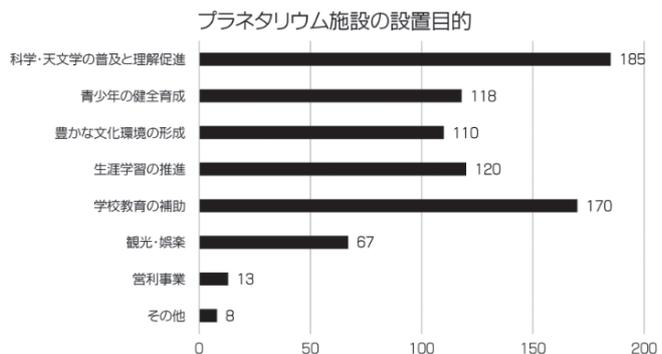
次に、「学校教育の補助」については、当館では学校教育にも貢献するため、プラネタリウムの学習利用を受け入れています。教室では扱いづらい星の観察や天体の動きについて、学習指導要領に則った内容で、プラネタリウム機

能とドーム空間を存分に活かした投映を行っています。星空が正確に再現されているだけでなく、日周運動や年周運動なども再現できるため、高い学習効果が望めます。さらにデジタルプラネタリウムの導入によって、地上から見た星空だけでなく、宇宙空間まで再現できるようになり、児童・生徒の興味や関心をより高めています。

また、「豊かな文化環境の形成」については、星や宇宙だけにとどまらないプラネタリウムの活用を行っています。例えば、2021 年の東京オリンピックのライブ中継をプラネタリウムで行い、多くの市民の皆さんにドーム空間ならではの臨場感で競技を楽しんでいただきました。そのほかにも、コンサートや演劇、講演会など、市民の皆さんが文化に触れる機会を提供しています。

ここまで当館プラネタリウムの目的と取組についてみてきましたが、下図のとおり、プラネタリウム施設の目的は、施設によってさまざまです。ご自身の見たいもの、体験したいものに合ったプラネタリウムを探してみるのも楽しいかもしれません。

当館プラネタリウムは、これからも市民の皆さんの教育、学術、文化の発展に貢献できるよう日々努めてまいりますので、ぜひお越しください。（上野アイ子）



日本プラネタリウム協議会 編集発行『プラネタリウムデータブック 2020』より